

上手な絵はやめて良い絵を描こう

—— 図画工作、表現における写実に捉われない絵画指導 ——

池田 拓馬

要旨

幼児教育および初等教育、幼児教育での絵画指導の実践をもとに、その指導法を論ずるものである。また絵画を評価する際、モチーフが具体的に描かれている事、またはそれが写實的に表現されていることが評価の基準となることが多い。そのような写實性に捉われない絵画の評価基準を見出し、幼児や児童と「できた喜び」を共有する方法を提示するとともに、その根拠となる理由を絵画が成立する構造から考察し提示する。また小学校5年生の図画工作において油彩画の制作を行なった実践例とともに論じていく。

キーワード：幼児教育|美術教育|図画工作|表現|絵画指導

1. はじめに

子どもはいつの頃からか自然に絵を描くようになる。「描く」という行為は人にとってとても自然な行為であるとともに、見たものや感じたものを表現する手段として身近に用いられているだろう。またその絵を評価する手段も一般的には上手に描けているかいないかで評価することは自然なこととして行なわれているように感じる。しかし表現においてのびのびとした良い表現であることと技術的に上手に書かれていることとはまったく違う別の観点である。

表現とは何かを増井(2010)によれば、「内面にあるものを表すこと」とあり、語源は【氷原】氷で覆われている広い原野とある¹⁾。すなわち何か溶け出てくる印象を語源としても表現していることが伺える。また美学の事典、編者美学会、池田(2020)によると、今日我々が使用している「芸術(英語のart)」という語はラテン語のアルス(ars)に由来し、このアルスはギリシャ語のテクネー(technē)に対応しており、テクネーやアルスは、自然物とは異なる

さまざまな対象を制作する技術や知識を総体的に意味する語であり、今日の芸術よりも広い範囲をもって、職人の制作も含めて使われていたという。そのうちアリストテレスにおいては、テクネーによって作られるものは製作者の「心のうちにその形相をもっている」とされている²⁾。このことから、やはり心の内部の考えや構想が外部に表出されることが表現と捉えて良いのではないだろうか。しかし表現されることではなく、見たままに描かれているわかりやすく描かれているという価値観が、私たちの生活の中で知らず知らずのうちに身につけてしまい、「上手」という評価方法に依存している。そのような評価方法に依存せず子どもが生き活きと絵を描き表現するための絵画指導方法と評価の方法を考察していきたい。

2. 図画工作指導の目的

平成29年告示小学校学習指導要領 第2章 第7節 図画工作において、第1目標には「表現及び鑑賞の活動を通して、造形的な見方・考

え方を働かせ、生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」³⁾とあり、さらに「(1) 対象や事象を捉える造形的な視点について自分の感覚や行為を通して理解するとともに、材料や用具を使い、表し方などを工夫して、創造的につくったり表したりすることができるようにする。(2) 造形的なよさや美しさ、表したいこと、表し方などについて考え、創造的に発想や構想をしたり、作品などに対する自分の見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。(3) つくりだす喜びを味わうとともに、感性を育み、楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養い、豊かな情操を培う。」とある、すなわち自分なりに工夫し想像的な活動や能力が求められ、技術的に優れた表現を目指すとは書かれていない。さらには(2)にもあるように技術そのもの以外にも創造的に発想し自分の見方や考え方を深めることが重要とされている。

これは平成20年告示・道徳改訂反映後の旧小学校学習指導要領から大きな変化を遂げている、旧小学校学習指導要領 第2章 第7節 図画工作、第1目標においては「表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。」とある。よって技術的に「上手に描く」ことも以前までは学習指導要領の中で求められており教員たちはその目的のもと指導を行っていたこととなる。

このように新しい学習指導要領のもとどのような観点に注意し造形指導や図画工作の指導、絵画指導指導にあたっていけば良いのか、次項に筆者の取り組みを紹介し絵画指導の可能性を探っていく。

3. これまでの絵画を用いた題材設定と取り組みについて

筆者はこれまで小学校図画工作の非常勤

講師を5年行い、その後保育士養成校(本学)の講師を行いながら用事造形の指導等にも取り組んできた。その活動の中から絵画指導を抜粋し活動を紹介するとともに、「上手」に捉われない活動内容の提案や考察を述べていく。

3-1 <まぜ色で“こころ”を描こう>

対象： 小学3年生、幼児3～5歳児

期間： 1時間

材料： 画用紙、クレヨン

内容： 小学生の場合は初めて担当になった学級において教員児童ともに絵を用いて自己紹介をする。色の印象について話し合い、自分の性格について考える。気持ちが混ざることもあるよね?など、問いかけ色を混色する動機を持つ。幼児の場合は前置きを作らずに指導者がクレヨンの混色を実演する。混ぜて作った水色とクレヨンの水色では色が違うことを感じ作業に移る。画用紙に円を描き、その内側をクレヨンを用いて隙間がなくなるまで塗る。様々な色を混色(マゼイロ)させ複雑な色を描く。描き終わった後、小学生の場合は「性格」に基づいたタイトル、幼児やそのほか大人に対して行う場合は「その円があなたの気持ちだったらどんな気持ちか?」という問いかけのもとタイトルをつける。

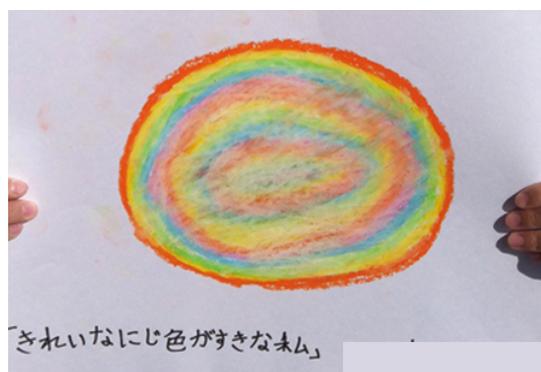


図1 小学校3年生(横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校)の作品「きれいなにじ色がすきなわたし」

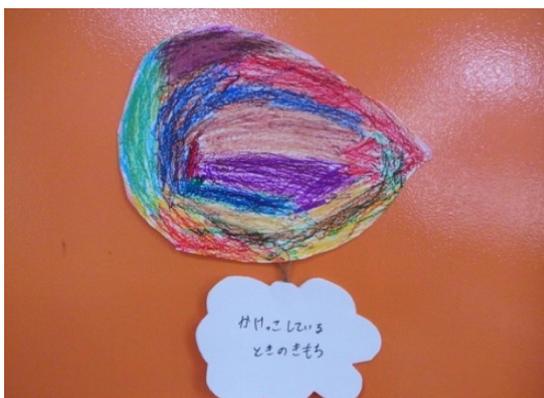


図 2 4歳児(八戸学院聖アンナ幼稚園)の作品
「かけっこしているときのきもち」

このように子どもは「色を描いて楽しむ」と「題名を考える」ことをそれぞれ分けて行うことで、「描くこと」と「考えること」にそれぞれ集中し、活動を楽しむことができ、このことが最大の特徴である。またこの活動はデカルコマニーという技法で描かれた図形をもとに心理臨床で行われる心理検査のひとつ「ロールシャッハテスト」の「投影法」という手法を応用している。自分で描いた模様や色について後から直感的に感じる自分の心を投影している。

またこの描画活動を通じ、児童や幼児たち全員が同じモチーフを描いたり、同じ体験を思い出画などとして描いたりなど、画一的な表現になることを回避する。また反対にただ自由画を描いてねらいの見つけにくい活動にすることも同時に回避し、のびのびとした自由な表現と幼稚園教育や学校教育の場面で取り入れることが可能な様式として本活動を設定している。でき上がった作品からは自由に描かれた色や形がそれ自体で楽しみ鑑賞できるとともに、幼稚園や小学校以外の場面などで普段子どもが何に興味を持ち暮らしているのか、どんなパーソナリティーを持ち世界を感じているのかを顕にすることができる。

これは小学校学習指導要領、第2章各教科第7節図画工作における第1の目標の(2)には

「造形的なよさや美しさ、表したいこと、表し方などについて考え、想像的に発想や構想をしたり、作品などに対する自分の見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。」とある以上の項目において特に「自分の見方や感じ方を深めたりする」の部分の目標達成に関係できる活動と言えるのではないか。また「造形的なよさや美しさ、表したいこと、表し方などについて考え、想像的に発想や構想をしたり、(後略)」という部分においては当初は意図的に色面を構成していなかったとしても、その色や形に後付けで意味を付与することで、色や形またその美しさに言葉や意味を関連付ける上奏を養うことで以後の表現が意図的に構想できるようになると考える。

さらに小学校や幼稚園などで絵を描く場合、鑑賞者を想定した題材設定が用いられることがある。例えば、運動会を行った後に思い出画として競技に取り組む様子を絵にする、遠足に行った思い出を絵にするなどがあるが、それらは実際にはとても複雑な行為の集合体となる課題なのだ。「記憶を辿る」ことがまず初めに行われ、次にそれを具体的に他者に伝わる形に置き換えることが求められ、「活動が行われた空間を描く」こと、「人体を描く」こと、そこで行われたことを説明する「ものを描く」こと、それら全てを「関係性をもって描く」さらに時間軸を持った一連の記憶を1つの画面上に「構成配置」することなどである。この一つの画面に構成配置することは、キュビズムの画家たちが取り組んだように動いていたものを止まって描くという矛盾、また入れ替わり立ち替わりその場に現れた複数の事物が描けないなどの矛盾もある。このような矛盾に打ち勝ちながら、先にあげた項目を全て描きあげることは絵画を専門的に学修してきた筆者でも非常に複雑で気の遠くなる作業のように思える。さらに港(1996)によると人間の記憶には出来事記憶、意味記憶、手続き記憶、宣言記憶等々とさまざまな異なる特性がある

4). とあるようにできごとの記憶を辿ること自体が容易なことではない。しかし教育現場ではこういった思い出画というような題材が用いられることが多く、求められる背景として作品が飾られる場面が、保護者参観などの場であることがある。その場面を見ていない鑑賞者に内容を伝達するためには先にあげた空間と時間を一つの画面に描き説明することが求められるのである。しかしそういったニーズがあることも教育現場の実情であることは間違いない。そこで本活動は、心として題名を付けることを通じ誰もが普遍的に共感できる要素も失わずに豊かな表現やのびのびと活動との両立を図った内容と言えるのではないだろうか。

さらにこの活動を発展させた「青いリンゴをどう褒める？」という活動を次に紹介する。

3-2<青いリンゴをどう褒める？>

対象： 幼児5歳児、大人

時間： 1時間

材料： 画用紙、クレヨン、色画用紙、ポストイットなど

道具： はさみ、テープカッター、のり、ペンなど

内容： リンゴを描くことは伝えずに、画用紙に円を描きその中をクレヨンで隙間がなくなるまで色を自由に塗る。様々な色を混色（マゼイロ）させ自分だけの色を描き、根気よく隙間なく塗りつぶしていく。できあがった後に「リンゴにする」と伝え色画用紙などでへたと葉をつける。壁などに展示した後に自分が作った以外のリンゴに「～リンゴ」と名前をつけ合う。

ねらい： 隙間なくクレヨンを塗る根気と技能を養う。クレヨンが混色できることを知り自分だけの色を作る楽しさを味わう。制作意図と違った作品が出来上がる経験を通し寛容力を養う。他者の作品に題

名をつけることで、より深く鑑賞し集中力を養うとともに、他者の作品に直接関わることで協調性も育む。

この活動は前に紹介した「まぜ色で“ころ”を描こう」を発展させた活動である。単純な円という領域を決めその中を自由な色で描く方法を同じく採用した。描き終わった後にりんごにすることを告げることで意図して具体的なものを描くことを避け色彩や形の面白さ、複雑さを体験することを第一の目的とした。人は意図してものを描く場合必然的に何かを説明しようとしてしまう。



図3 4歳児(八戸学院幼稚園)の作品、付けられたリンゴの名前「いろんなあじりんご」「ぶるぶりんご」「めろんりんご」など



図4 大人が描いた作品(「保育の学校」研修会にて)、貼られたリンゴの名前「ふわふわりんご」「母性たっぷりんご」「ゆめりんご」など

北沢・畠山・中村(2019)によれば、それは描画の発達過程における図式期見られる傾向として。空間や物事の認知機能が発達することによって周囲の空間を認知しそれを画面上に關係性をもって表現するようになると言われ⁹⁾、描画の発達過程として自然なことである。一方、記号化された表現は意味を表すことが代位1の目標となるため、絵画的な色彩や線の動き形の組み合わせの面白さなどの豊かな表現を阻害してしまうこともある。絵の中で説明をしようとするとき色や形の豊かさが重要視されるのではなく、具象的に他者がわかるように表現されているかなど言語的な要素を色や形で表現しなければならなくなるからだ。言語的な表現を色彩や形に置き換えることに注視した作品がもしあればそれはすなわちそのようなコンセプトの表現になりうることももちろんあるが、ここでは色彩造形的に工夫して描くことを重要視することとした。

さらに自分で描いた作品にタイトルをつけるのではなく他者の作品に付箋を用いてリンゴの名前をつけることで仕上がった作品を相互鑑賞する機会を設ける。園児や児童であれば日常的に他者の作品を鑑賞したりそれについて話したりすることもあるが、タイトルをつけるという関わりを持つことでより深く興味を持つきっかけとし、他者の作品と自分の考えた題名が合わせて一つの作品となることで一歩踏み込んだ鑑賞の機会を提供する。



図5 保護者と一緒に友人の作品の題名を考える様子

また鑑賞に訪れた保護者や家族にも付箋を用意し作品に題名をつけ流機会を設けることで、子どもが制作者で保護者が鑑賞者という決まった役割を見直し、作品について一緒に話したり考えたりすることで、それぞれが自由に干渉し合いながら鑑賞を楽しむ対話型鑑賞も同時に取り入れることを目的とした。

これまで紹介した二つの活動はどれも抽象的な表現を行ったのち、リンゴといった具象形に変換したり、心といった具体的な題名をつけたりすることで表現の幅を広げるとともに鑑賞者への理解を担保する活動を紹介してきた。次に紹介するのは見ることや目に映ったものを記号的な表現に頼らずにどのように表現していくかという問題に着目した活動を紹介する。

3-3<木を見上げて描こう>

対象：小学3年生

時間：2時間

材料：クレヨン、画板(探検バック)、画用紙
内容：春の時期に花の咲いた桜の木の下で、見上げる構図で描く。木の一部分画面からはみ出しても良いことを共有し取り組む。

ねらい：木を描く際、記号的な認識の観点から真横から見た構図で描かれることが多い。木を見上げ視界いっぱい枝が広がる視点に立つことで記号的な描画方法を避け、枝や花の有機的に広がる形など木本来の形を観察する。外で絵を描く開放感を体験する。

この題材設定によって描かれた作品が図6と図7となる。眼前に広がった桜の木の枝や花を画面いっぱい自由に書くことで、枝の一本一本や花が咲き誇る数など普段、木全体を描く場合見過ごされがちなディテールを

見て描くことを目的とした。



図6「木を見上げて描こう」小学3年生(横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校)作品



図7「木を見上げて描こう」小学3年生(横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校)作品

指導の際はできるだけ晴れた気持ちの良い日を選び、子どもが外に出て楽しいとまず感じることも大切にする。枝を描く躍動感を屋外の気持ち良い感覚とともに描くことをねらいとした。さらに桜の木の下ではできるだけ近くに寄るように促し見上げないほどの位置から描いてもらうことにした。そのことにより机の前で椅子に座って描く視点がずらされることで、遠近法に囚われない描き方を目指した。

3-4<キャンバスを作って油絵を描こう>

対象：小学5年生

時間：8時間

材料：キャンバス、木枠、油絵の具

内容：木枠の組み立て、キャンバスを張る。描きたいものや写真を用意しキャンバスに油絵の具で描いていく。何度も重ねられる特性を活かし絵の具を塗り重ね根気良く進める。

ねらい：描く行為が支持体を作ることから成り立っていることを理解する。油絵の具の使い方を学び新しい描画材に触れる。根気よく描くことで集中力を培って取り組む粘り強さを養う。

図8及び図9のように油絵を描く前にまずキャンバスを組み立てる作業から行なった。これは何かを描く場合、画用紙や同じくキャンバスなどの支持体となるものを意識することで「描いている」という行為から絵を「作っている」という感覚に置き直すことを第一の目的とした。なぜならば、北沢・畠山・中村(2019)によれば、小学校高学年では写実期という描画の発達段階に入り批判力が増す反面、表現したい理想像と表現力の不足の悩みから、創作意欲の停滞が見られ、表現活動そのものが停滞する子どもが多くみられる、という。反面そういった児童も工作に関しては苦手意識を持つことも少ないためまず工作に近い活動から導入とすることとした。



図8「キャンバスを作って油絵を描こう」木枠を組み立てる様子



図 9「キャンバスを作って油絵を描こう」協力してキャンバスを貼る様子

さらに小学校学習指導要領、第2章各教科第7節図画工作における第3の指導計画の作成と内容の取り扱い(6)にある通り「(前略)必要に応じて、当該学年より前の学年において初歩的な形で取り上げたり、その後の学年で繰り返し取り上げたりすること」とあるように同じく(6)のイ第3学年及び第4学年においては、「(前略)木切れ、板材、釘、水彩絵の具、小刀、使いやすいのこぎり、金槌などを用いること。」とある中から木切れ、釘、金づちを前学年の復習としても計画の中に組み入れることが可能だ。

また小学校学習指導要領、第2章各教科第7節図画工作における第3指導計画の作成と内容の取り扱い1の(4)の工作に表すことの内容に配当する授業字数が、絵や立体に表すことの内容に配当する授業時数とおよそ等しくなるよう計画すること、とあるように取り扱いの目標の達成にも近づくことが可能ではないか。これは油絵に限らずその他の描画表現、立体表現などにも同様に材料や支持体から作ることによって工作に表すことの内容に配当する字数がおよそ等しくなることに寄与できるのではないだろうか。けれども本題材では上記の目標を達成するのは難しく、本課題においては8時間の時数のうち2時間が工作に当てられることとなった。

始めの2時間でキャンバスを組み立て、下

塗りをジェッソ⁶⁾やモデリングペースト⁷⁾を用い行なった。その後次週の単元より絵を描くことを伝え各々描きたいモチーフや好きなものの写真を自宅から持参し油絵を描いた。

油絵は他の画材に比べ匂いや刺激が強いことを考慮し、全員作業に入る前にハンドクリームを塗り皮膚を保護し、描画の際は喚起を行いながら進行した。また基本的な油彩画の使用方法、絵具をオイルと混ぜて画面にのせることなど、使用後の筆の洗い方なども説明した。パレットは片付けの簡略化を考慮し紙パレットとした。

描く際の声がけに何よりも注意したことは絵具を楽しんで扱うということだ。その一例として豚毛の一般的な油彩の筆だけではなくペインティングナイフも使用することで当初のねらいにもあった通り「描く」感覚よりも「作る」感覚を持たせることに注意し描写をすることや上手く描くことから意識を削らせることとした。また色はできるだけ多く作ること、チューブから出したままの絵具は極力使わないことを大切な約束として事前に伝えた。

そのような指導のもとできた作品の一例が図10である。この作品はお母さんが好きな薔薇を描いていたが上手く描けなかったと感じたことをきっかけに、それまで使用していなかったペインティングナイフを用い周囲をピンク色で塗っていったところ薔薇の花そのものよりもそれを取り巻く空間が淡い色に染まっているような素晴らしい表現となっている。周囲の余白を塗ったピンクの色も全て同じではなく濃い部分と淡い部分があったり、最初にうまくいかなかった部分が絵具の隙間から覗いていたり画面の構成としても複雑で色彩も豊かになっている。その後周囲の色を塗ったピンクを用いバラの花の内側の輪郭を描いたという。このように絵具遊びを促すことで失敗から成功につながる例となった。



図 10 「キャンバスを作って油絵を描こう」小学校 5 年生(横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校)作品

さらに上手に描くことから意識を逸らすために「表現として描こう」ということも繰り返し伝えることを心がけた。例えば図工室の机のキズを描く際などは、キズの描き方を教えるのではなくキズにも色々な形や色が染み込んだキズなどがあることに気づくように促し、それをキズや色がどんな風についたか、息良いよくついたか不意についてしまったのか、などを創造して描いてみようということを伝えた。そのことでキズそのものをうまく描くのではなくその背景にあるできごとや誰かの行為に想いを巡らすことで自分の表現を工夫するきっかけとした。そのような指導のもと出来上がった作品が図 11 となる。机のキズを筆の筆致を用いて表現されていることがわかる。



図 11 「キャンバスを作って油絵を描こう」小学校 5 年生(横浜国立大学教育人間科学部附属

鎌倉小学校)作品

図 4 では動物が好きな男子が図鑑の写真を見て鳥の絵を描いた作品だ。羽の色は当初青一色で塗られていた際に以下のように指導した。その児童が使っているパレット上で実際に青を他の色と混ぜて見せ、いろいろな青ができることを視覚的に実感してもらい、自分なりに工夫し描くように伝える。また形が上手く描けないと、落ち込む様子も見られたため形は十分に描けていること、それよりもこの鳥の美しさは羽の色にあるのではないかと、フォームとデッサンに注視しないよう促した。



図 12 「キャンバスを作って油絵を描こう」小学校 5 年生(横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校)作品

その結果、図 4 のようにさまざまな色の青が入り混じる表現力豊かな作品となった。さらに空という抽象的な色面を持つ部分には主題の鳥よりも色彩豊かな表現がみられ鳥がまさにその空へ向かって飛び立とうとしているかのような情緒を鑑賞者に感じさせる作品となった。

4. 考察「絵を描くこと」の可能性を広げるために

このように絵を描くということは何を主題

として描き、どんな技法を使うのか、また何を評価基準として声かけを行うのかによって子どもの表現は大きく変わってくると考えられる。一連の題材設定の中で私が絵の評価基準としてきた観点はまず「自分なりの色で描いているか」これはクレヨンのまぜ色の課題にもあるようにメーカーが作り販売したクレヨンの色ではなく、自分なりに色を試行錯誤して作り絵を描こうとする姿勢が大切になる。それによって色ができたかできないかは次の問題として保留としまずは自分なりに色を工夫することが大切である。

これはモネを代表とする印象派の画家たちの絵を参考にすると良い。印象派の画家たちは戸外描写が重要視された芸術家の集団だ⁸⁾。彼らの絵は刻一刻と変わる光を描こうとしたため、景色やそのものの持つ本来の固有色を用いるのではなく、夕暮れであれば赤い光に包まれる景色、明け方であればグレーや青に染まる水面や船を描いた。

このように我々が普段用いている固有色やメーカーが調合した青や赤などの色は自然界の色と比較するとどれだけ不自然かということがわかる。青いリンゴを描こうという題材を考えるきっかけにもなった、「子どもが固有色ではない色を用いて描いていると心配になる」という保護者の意見も印象派に続くジョルジュ・スーラやシニャックの固有色から絵画を解放させた画家がなぜ、さまざまな色彩を用いて表現したかを知れば心配もなくなることだろう⁹⁾。さらに子どもはカタログ期(前図式期)と呼ばれる描画発達の段階では固有色の概念はなく描きたい色で描くという特徴が見られるため、そのような発達段階があるということをしかりと理解した上で絵画指導に望むことが重要である。

次に大切にすることは「抽象的なものに意味付けする」ということです。これは題材設定の中で大変大切にしたいものの一つで、私が前にも述べたように、思い出画のような具象的な

表現に依存してしまうと「記憶を辿る」、「空間を描く」、「人体を描く」、「ものを描く」こと、それら全てを「関係性をもって描く」という子どもには難易度の高い技術力を要請してしまうことになる。しかし抽象的な表現を許容しそれに具体的な感情や意味を付与するという構造を用いれば、何を表現しても良い状態となる。これは一つのモチーフや一つの完成形へ向かい表現されるような題材クローズドエンドな状態を回避しオープンエンドな状態を作り安心してさまざまな工夫をして良いという状態が自然とできあがる。そういった環境の中で子ども自分なりに工夫し伝える喜びを育むようになるのではないだろうか。丸い円の中を塗りつぶす題材一つとっても、リンゴにする、お面にする、集めて模様を作る、空に見立てる、星に見立てるなどさまざまな題材が考えられるだろう。

絵の指導方法を考える以前に自分と子ども、その作品が立つ舞台を適切に設定することが何よりも重要となるだろう。

また「木を見上げて描こう」でも紹介したように実際のもを観察し描くということも大切にしたい要素だ。しかしいざ見えたものを描こうとすると、意味や内容を描こうとするため説明的、記号的な表現となってしまうことがある。そういったことを回避するためにも先ほどもあげた「抽象的」という概念が重要となる。「木を見上げて描こう」の題材では木の全体像を画面いっぱい描くことで抽象的な構成として許容し、枝や花などのディテールを具象的に描くように勧めることで、全てを説明的に書かなくても良く、枝や花を観察し描くということに集中できる。さらに枝や花に見えることよりもその枝の向きや花が咲いている感覚などのリズムを大切にすることを問いかけることで木や植物が本来持っている有機的なリズムや色彩を捉えるきっかけとなる。

さらに「キャンバスを作って油絵を描こう」

の題材の中では、油絵という扱いが難しい反面、表現力の高い描画材料を用いることで子どもそれぞれの工夫から生まれた表現を視覚化させることができる。ここでは実際に写真や物を描いてもらうが、こちらでモチーフを組むというデッサンの訓練的な手法は用いずに各々の興味のある物を選ぶことも大切にしている。興味関心の高いモチーフだからこそ思いや感情といった内面を投影し表現するきっかけとなるはずである。また選んだモチーフのほとんどは具象的であったが、「鳥の絵」を描いた子どものように描写することに注意がいく際はある程度の形やフォルムが捕らえられた後は色彩表現や絵具遊びを楽しむように促すことでのびのびとした表現となるよう心がけ実際にそのような表現となった作品があった。

5. ものを見る、絵を描く、意味をつけるといふ複雑な行為を分割し簡単にする

当初から述べているように、「絵を描く」という行為は人にとって自然な行為であるのかもしれない。しかしその一方で絵を描くということは高度な情報処理と技術、画面構成の元に行われている。記号的に空間や事物を捉えることが日常化した大人にとってそれは一見簡単に見えることもあるかもしれない。しかし周りの環境を記号的な視点ではなく五感を用い全身で感じている子どもにとっては、絵画に記載する情報とそうでない情報を取捨し1つの画面上に構成することは難しい。絵を描くということは高度な情報処理と技術をそれぞれ役割毎に分割しその中で何が題材の中に必要かを取捨し、またどの工程を重視すべきかを考え、絵を描くという行為を単純化して提示することで、絵画の中に含まれるさまざまな素晴らしさや表現の要素の中から1つ、もしくは2つを抽出し大切にしたい表現の

呼び題材設定ができるのではないだろうか。

最後に立方体のデッサンと鉛筆の濃淡を描く訓練が中学校のデッサンの授業の中でよく用いられるが、この題材は美術という専門分野に触れる入り口としてはあまりにも、敷居の高い描画訓練だと感じていた。濃淡を配色する訓練と立方体のデッサンの工程を分割しかつ自由度を持たせた題材を紹介したい。

<苦手意識を持たないための分割デッサン>

対象： 高校1年生、短期大学部1年生、社会人他

時間： 1時間

材料： 鉛筆各種、ねり消しゴム、プラスチック消しゴム、ガーゼ、カッターなど

内容： トーンを作るデッサン、立方体を描くデッサンを塗り絵状のマスが描かれた画用紙に自由なトーンを作ったのち、切りはりしトーンデッサンは明暗の順に並べ替え、立方体は光の向きを意識し組み立てることでデッサンを完成させる。

ねらい： 通常のトーンデッサンの訓練はマス目に「はみ出さずに塗る」「明暗の順番に描く」「丁寧に描く」という複雑な行程を同時に行なっている。また立体物のデッサンも同様に「形をとる」「量感を出す」「描き方を統一する」というより複雑な行程である。その中で「トーンを作り見て感じる」という点に重点を置き、自由に描いてもデッサンになることやデッサンをするものの複雑な行程の理解へつなげる。

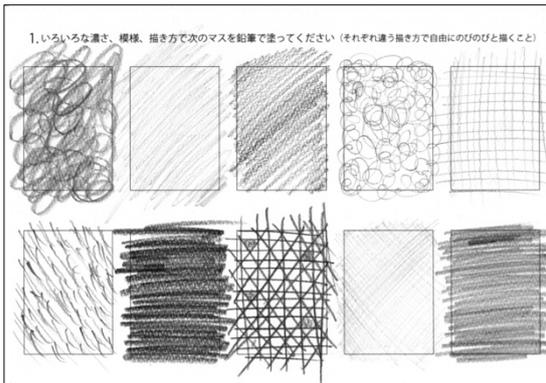


図 13 苦手意識を持たないための分割デッサン トーンデッサン

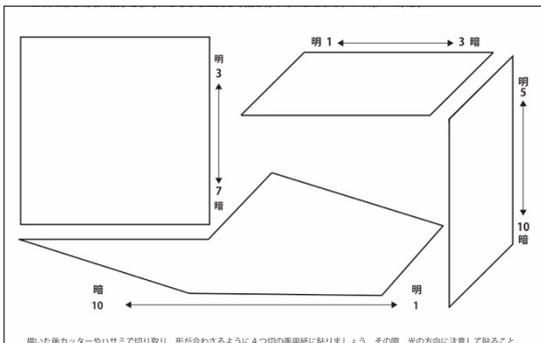


図 14 苦手意識を持たないための分割デッサン 立方体のデッサン型紙

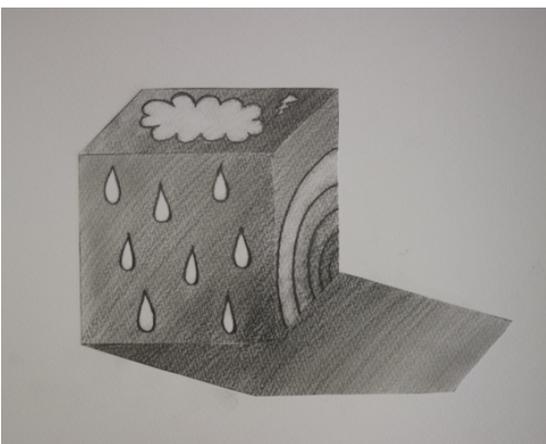


図 15 苦手意識を持たないための分割デッサン 立方体のデッサン

このようにトーンデッサンをする際必要とされる基本的な技能「はみ出さずに塗る」

「明暗の順番に描く」「丁寧に描く」という行程それら全てを廃することにした。まず「はみ出さずに塗る」は塗った後マスをハサミで切ることではみ出しながら思い切り描けるようにした。「明暗の順番に描く」では同じくマスで区切った部分を塗った後、並べ替えることで順番にトーンを描かなければならないという制約を廃した。最後に「丁寧に描く」という項目はそもそも廃止とし、丁寧に均質に描かなくともトーンは描けるという学習へと変換した。

立方体のデッサンも同様に「形をとる」「量感を出す」「描き方を統一する」が必要となるがトーンのデッサンと同じように「形を取る」は先に型紙を用意することで廃し、「量感を出す」ことは指示通りに描くことで量感が出ることを知り、「描き方を統一する」では書き方を統一しなくともデッサンとして成立することを知るきっかけとした。

このような題材設定や手法は本来のデッサンの見る力、描く力を育む目的からは逸脱しているかもしれない。けれどもこれらの経験を通し自由に描きながらもデッサンとして成立することを体感することで「デッサンができた」という感覚を体感し記憶することが何よりも大切である。そういった「できた」という土壌の上にさらに複雑なデッサンの目的、方法の訓練を積むことが可能になるのではないか。

このように絵画指導全般も複雑な絵画表現技術の組み合わせや記憶の分類、記憶の想起方法等をいま一度再考し実施する題材の中でどの技術や感覚、ねらいを体感、知覚することが目的なのかを明確にすること、子どもや体験者に「できた」という心を育むことを念頭に置き絵画指導に臨むことが何よりも大切ではないだろうか。

註・参考文献

- 1) 「日本語源広辞典」 増井金典 ミネルバ書房 2010年 p. 755
- 2) 「美学の事典」 美学会編 丸善出版 発行者 池田和弘 2020年 p. 46-48
- 3) 「小学校学習指導要領」(平成 29 年 3 月告示) 文部科学省
- 4) 「記憶「創造」と「想起」の力」 港千尋 著 講談社 1996年 p.31-32
- 5) 「子どもの造形表現—ワークシートで学ぶ—第 2 版」 北沢昌代 畠山智宏 中村光絵 著 開成出版 2019年 p. 23-25
- 6) アクリル絵具用の下地材だが今回は油彩画の下地として用いた。ホルベイン社製 <https://holbein-shop.com/?mode=grp&gid=1795207>
- 7) アクリル絵具用の下地材盛り上げ材 だが今回は油彩画の下地として用いた。ホルベイン社製 <https://holbein-shop.com/?mode=grp&gid=1795210>
- 8) 「印象派の挑戦 モネ、ルノワール、ドガたちの友情と戦い」 嶋田紀夫 著 小学館 2009年 p. 9 画家のモネは 1845 年に一家でノルマンディー海岸にあるセヌ河口の町ル・アーヴルに移住し、画家ブーダンから戸外描写の重要性を教えられていた。

9) 「西洋美術史を変えた名画 150」 木村泰 著 辰巳出版 2018年 p. 101 スーラの後を継ぎその色彩理論を発展させたのが、シニャックである。スーラの点描より点が大きく、華やかな表現になっている。シニャックは白百合なら白、空なら青といった、そのものに備わった色から絵画を完全に開放した。写實的に描くのなら、色もそのまま描かなければならないが、固有色を使わずに対象絵おとらえ描いたのだった。

他参考文献

「いちばん親切的な西洋美術史」 池上英洋 川口清香 荒井咲紀 著 新星出版社 2016年
「平成 29 年版 小学校学習指導要領 全文と改訂のピンポイント解説」 安彦忠彦 編

著者紹介

八戸学院大学短期大学部 幼児保育学科
准教授 池田拓馬